

青螺(さざえ)の禍

JJ1SXA/池

拓殖大学総長・渡辺利夫氏が、(今こそ、福澤の「脱亜論」に学べ)という文を、産経新聞(1月10日付)の正論に載せている、以前、「脱亜論(31,Jul,2013記)」と言う記事を書きましたが、正に我が意を得たりです、勿論、内容は拙稿とは比べるべくも無いですが…

福澤諭吉と言う大先達が、「脱亜論」を書く前の1890年(明治14年)7月に「時事小言緒言」で、次のような文章を書いている。

…抜粋引用…俚話に、青螺が殻中に収縮して愉快安堵なりと思ひ、その安心の最中に忽ち殻外の喧嘩異常なるを聞き、窃に頭を伸ばして四方を窺えば、豈計らんや身は既にその殻と共に魚市の俎上に在りと云ふことあり。国は人民の殻なり、その維持保護を忘却して可ならんや。近時の文明、世界の喧嘩、誠に異常なり。或は青螺の禍なきを期すべからず。この禍の憂うべきもの多くして之を憂るの少なきは、記者に於て再び不平なきを得ざるなり。…引用終り…

相変わらず、文語文体の文章は読みにくいが、大意は分かるでしょう。

120年以上前のことながら、現在にも当てはまるような内容だ、平和ボケの続く日本人は、正にこのサザエと同じ、「…憂るの少なきは、…」が当てはまる。

安倍政権の打ち出す、集団的自衛権の見直し、憲法改正(9条改正…国軍の創設等)に目の色を変えて反対論を振りまく人達は、福澤諭吉の言葉を良く検討して見たら如何でしょうか？

安倍首相の打ち出した「積極的平和主義」、その理念は(これまでの日本の平和主義は、自国が加害者にならなければ「それでよし」とする平和主義であった。しかし、21世紀の世界は、世界や地域の平和と安全のために「どのような積極的な役割を果たすのか」を訊ね、「世界市民の一員としての責任を果たすよう」求めている。日本の平和主義は、これまでの「消極的平和主義」「受動的平和主義」から新しい「積極的平和主義」「能動的平和主義」へとレベルアップしなければならぬ)としている。

「世界全体の平和無くして日本の平和無し」という「世界平和主義」だ、今や米国が世界の警察では無いと明言する時代に必要なことだ。

日本を除く諸外国の警察は余り良いイメージが少ない、米国が世界の警察と言っていた頃の警察のイメージは、西部開拓史時代の、正義の味方の保安官だったので、正義のために体を張って闘う保安官は絶対に必要だったので、しかし、対外的に、絶対的な強さが無くなった米国(経済面も含め)は、保安官は務まらなくなったのだ。

(22.Jan,2014記)